人女房その他

昔話叙説Ⅲ

臼田甚五郎著

桜楓社

著者略歴

大正4年（1915）東京にうまれる。
昭和12年国學院大學国文学科卒業。
昭和32年国學院大学教授となり，現在に至る。
専攻は日本文芸伝統の研究，口承文芸の研究。
文学博士。主な著書に「神道と文学」「歌謡民俗記」「平安女流歌人」「国学大系・本居宣長集」「日本藝能叙説」「食はず女房その他」などがある。

廃止印検

天人女房その他　昔話叙説 III

昭和四十八年十一月二十五日　初版発行
昭和五十一年五月十日　初版二刷

定価　二〇〇〇円

著者　臼田甚五郎
発行者　及川篤二
印刷所　共信社印刷所

101 東京都千代田区猿楽町二―八―一三
㈱桜楓社
電話(〇三)二九一―五六六一
振替東京六―一八〇二〇

Printed in Japan　0093―731172―0723

目　次

天人女房……五
説話、伝承のかたち……一一七
山田白滝……一三四
日本の昔話……二三五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

天人女房その他

昔話叙説Ⅲ

天人女房

一

「天人女房」譚は、羽衣伝説になったりして、日本人にとっては、親しみの深い物語である。その研究も積み重ねられ、高木敏雄・金田一京助・西村真次・松村武雄・柳田国男・関敬吾の諸氏の論考が世に出てゐる。

私が興味をそそられて、ここに取り上げることになった動機は、雑誌『国文学』の四十七年九月号に寄せた「説話、伝承のかたち」に述べた通り、四十七年六月末に一夜を過した台湾の名勝日月譚の涵碧楼で、さやかなる月を仰ぎながら、林雪華女史から聞いた「天人女房」譚に胸はずませた時にある。

林女史が語ってくれた「天人女房」譚の中で、強烈な印象をのこしたのは、農夫が蔭として身をひそめ、仙女の水浴びをぬすみ見てゐたのが草埤（ツァオタイ）（稲むら）であり、仙女の霓霞衣（ニイシャンイー）（身についてふはつとした幻のやうな衣）をかくしてしまったのが草埤であったことである。草埤がいかに

も鮮かに農村の生活を描き出してくれるからであつた。草染が日本の稲むら・稲づか・にほの如くであるならば、田の神の憑り代であつた信仰が存してゐまいかといふ問題にまでひろがるからであつた。それから、土地公・土地神・土帝君の信仰が存することを知つたりした。

台湾の旅は五日間で終へて、七月の中に、二度秋田県へ赴いた。初旬に日本学術会議第一部総会に出席のため秋田市へ出かけて、道教研究の権威たる窪徳忠氏と総会の席で出逢ひ、中国・台湾・沖縄の土地神・土帝君・田の神について有益な談を得た。下旬に國學院大學民俗文学研究会の諸君と共に、本庄市・由利郡の昔話採訪に出かけた。例によつて、私は本部に祭り上げられ、本庄市周辺を廻つた。その第一夜、鳥海村に入つた田畑千秋君から早速に長い「天人女房」譚を聞いたといふ報告が入つた。若い諸君が採訪に散る前に、台湾の昂奮さめやらぬ私は「天人女房」の重要性をぶち上げておいたのだ。その中で、『徳之島の昔話』にも触れておいた。『徳之島の昔話』の編者田畑英勝氏が田畑千秋君の父親であるから、奇縁と言へば奇縁であつた。偶然の如くであるが、「天人女房」譚の分布の世界的であることを思へば必然でもある。南の「天人口説」と北の「天人女房」が対面したやうでうれしくてならなかつた。

鳥海村は、その名の示す如く、出羽富士の佳名に誇る通り裾を左右にひいた麗しい鳥海山の麓にある山村だ。近いうちにダムの水底に沈む運命を持つ村だから、諸般の採訪調査を急がな

ければならない。昔話を語る人が共に沈むわけではないけれども、伝承をはぐくんだ自然環境・生活環境が失はれてしまふ筈である。その寸前で救ひ得たことは有難いの一語に尽きる。その鳥海村上平根の佐藤タミさん（明治三十五年九月十一日生）が語りついだ「天人女房」譚を左に掲げよう。（テープからの翻字不明の条は……でしるす。）

むかし、綺麗な女ごが三人泳いでゐたと。ハァー綺麗な女ごだゐたもんだなあと思て、傍に見たこともねえ綺麗な着物あるけどな、それから一人な、姉っこたちの着て来た着物だな思て、一人の着物隠したけども、本気のねえ元三郎は。そして知らねふりして。

ああ今度は家さ帰るぞってなぁ、その姉っこたちはあがつて来て着物尋ねたども、一人の着物ねえわけだハァ。

「ハァーここさ俺置いたのにだども、どこさ行つたのだろ。ハァー俺ここさたしかに置いたのにだども、何回も来て探すのにねえだども。」

ほかの二人が来てしまつての、

「早く帰らねば怒られる、帰らうぞ。だども、お前にはゆつくり探して、そして見つけてから、上の家さ帰らうぞ。」て。

それで二人は天さのぼつたども、今ある羽衣だな、羽のある着物着てな、ひらりひらり

と舞ひ上るだ。

ハハー、これは天から来た者だなあと思つて、その木の蔭に隠れて見てゐてな、知らぬふりして自分の家サ来たども、その元三郎はな。そしてその着物サ隠して、着物ねえば天サのぼられねえ思てな。

なんぼ尋ねても尋ねても着物サねえであきれはててしまつて、川ばたの一番近え元三郎の家サ、元三郎の家は一番川ばたに近えとこで、そこの家サ来たと。

「どうか一晩泊めてくだはれ。天から水浴びりに来たども、着物なくなつて、家サ帰えられねぇ。」てな。いい姉っこだじょうな。

「ハァーそれは困つたな、食べる物もろくな物ねえども、泊れ泊れ。」とな。

元三郎は、そして泊つても、自分の着てゐた着物を、ぼろぼろ着物を着せて、知らねぇふりしてゐたわけだ。明日になつても、明後日なつても、その着物ねえば、帰らねえだろ。どうしても行くとこなくて、その元三郎の家にゐたわけだ。

「お前……俺の妻になつてくれハー。」と言はれたけれど、なんとも言はで「いやんだ。」と言うても行くとこもなくて、そこの元三郎の妻となつて、一日二日とたち、暮してゐるうちに、一年も二年もなつたじょうも。子供もゐたんじょうも、女の子で、その子供、み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くくてみくくて、その元三郎も、なーんと一所懸命なつて離れずに、みんな村の人から羨ましがられて、あの本気のねえ元三郎が、どこからあんなよい嫁っこ貰つたんだろ思て。

着物はねえども、どこサ行つたか、その辺の人から話し聞きたいと思つたが、誰もそんな美しい羽の生えた着物見たこともねえ、話も聞いたこともねえ、誰もおぼえた人は居ねえども。そうしてるうちに、その子供五つもなつたじょうもな。そうした歌っこも歌へるやうになつたどもな。

ある秋のことで、稲刈つて、ここでは稲刈つて入れるのを小屋といふが、その小屋のねえ人は外さ稲を積んだものだわな。みおちゅうてな。その元三郎はみお積みをしたけど、その子供は父がみお積みしてゐるとこサ来て見てたら、どこから出したのか、綺麗な物、そのみおの中サ隠したじょうも。

「父、父、それはなんだー」

「これはなー、アバアアンの羽衣と言ふもんだ。母にお言なよ。母サお言なよ。」

みおの中に隠したけどなア。アバアアンの羽衣とな、なにがなんだか分らねえども、美しいものだと子供見てたわけだ。

そしたら、ある時のこと、あばは縁側で針仕事をして、……そしたら、子供、歌こ歌っ

てゐるけど、

　アバアアンの羽衣を
　テテはみおに積みこんだ

と歌ふけどな。

「何だ、アバアアンの羽衣、テテはみおに。何言ってんだ坊。」ってな。

「父、お言なと言ふもん。」また向ふさ行ってな、

　アバアアンの羽衣を
　テテはみおに積みこんだ

と言ふやな。

「何言ってんだ坊、もう一寸此方サ来て、しっかり聞かせて。」

「父、お言なと言ふんだ。」また、

　アバアアンの羽衣を
　テテはみおに積みこんだ

て言ふでや。

をかしいなと思って、次の日父が何処かサ用があって居ない日、こっそりみおに行った

わけだ。そして、そのみおサ崩してみたわけだ。稲サぶつとばして。そしたら、自分が五年先に、天から川に泳ぎに来た時、なくなつた羽衣ナ、それちやんとなつて出居はつたじようも。あーこれは俺の羽衣だ。俺の夫知らねえふりして隠してと思つてな。それから今度は、その羽衣着て、

「坊、坊、天の爺さまサ連れてく。」子供おぶつて、そして書き置きして、紙さ書いて、昔なば、囲炉裏で、ここサ鍵つけるな、鍋なんか掛けるナ。それサつなげて置いたわけだ。「一番鶏の歌はないうち、千もっこ肥料して、それサタ顔の種植ゑて、それサ大きくなつたら、その蔓サつかまつて、天サのぼつて来い。」ってな書いて、さうして自分の子供のことおんぶして、天サのぼつて行つたげな。その女やな。

そして晩方になつて、父来て見た。

「坊、坊、坊。」いつもどこサ行けば、飴っこ買つて来る。「父、飴っこ買つて来た、坊。」呼んでも、誰も居ねえ。「アバー、アバー。」妻どこサ行つたか、妻も居ねえ。どこサ行つたんだろ、隣の婆サ聞きに行つたわけだ。

「俺家の子供どこ行つたか知らねえか。」「どこサ行つたか知らね、俺サ家来ねえ。」て言つたけど、その婆。

はーてなーと思つて、腹すいて来たし、マンマ食はうかなと思つて、帰つて来て、鍋おろさうかなと思つて、囲炉裏の鍵のとこサ見たけどナ、紙っこつながつて居たんだ。「なんだ、このっコは。」と思つて見たんばなア。「一番鶏の歌はねえうちに千もつこ肥料して、それサ夕顔の種植ゑて、それサ大きくなつたら、その蔓サつかまつて、天サのぼつて来い。」って。

「ハァー、子供に母サ教へるなと言つたども教へたな。」と思つて、みおサ行つたんば、みおペロッと崩れてしまつて、羽衣も何もねえどもナ。ハーあのがきなものを母サ教へて行かれてしまつたナー、残念なことした、と思つただども、なんとも仕方ねぇ。一番鶏の歌はねえうちに千もつこだ、それも。一所懸命しょったが、それも千。勘定もろくサ知らねぇは。一所懸命……しょったども、コケコッコーの一番鶏歌つたどもな。ハーたいした。元三郎、なんぼもつこしょったか分らねぇども、九百九十九もつこしょったじょうの。千もっこに一つ足りねえども、なんともしかたねぇ、なんぼ、もつこしょったか分らねども、一番鶏が歌つたら、大変だ。

隣の婆サとこ行つて、夕顔の種サ貰つて来て、それを植ゑたわけだ。そしたら、千もつこ……その上さ植ゑたんだし……その夕顔の蔓長くなつてのー。……から見れば、天サと

どいたように見えるとナ。今度大丈夫だ、天サ届いた、今度のぼつて行かねばナと思つて…昼食しょつてのぼり始めたじょうも、さうしてのぼた、のぼた、のぼた、なんぼのぼたて、天サ遠くてのぼりつかねえと、下の方を見れば、下の方は見えなくなつてしまつたでハー、ずつとのぼた、のぼた、のぼた。さうしたんば、もつこ足りねから、天サ……一番終りのとこサつかまつてナ、ユラユラユラユラ揺れる、おつかなくて、おつかなくて、誰か来てくれるといいな、と思つて見たら、天の犬の尻尾さがつてたナハー。よーしと思つてナ、その犬の尻尾サギュツとつかまつたてサ、犬ビツクリしてワンとはねあがつたと、そしたら、天の庭サブンとあがつたけハァー。よかつたと思つてナ、あちこち見たら、ほんで自分の子供よハァー。

「……の父が来た、父が来た。」言つたらな、

「坊、なして、父がお言なよと言つたんば、母サ教へて来たどもナ」と言つたどもナ。

さあ、そこの天の爺さま「よく里の父、よく来たな。」と言つて、喜んで御馳走したけどナー。毎日、御馳走して、何にも仕事もせで、飲んだり食つたりばかりしてナー。そのアバは気の毒で、

「父、父、なんぼないでも、毎日黙つて食つてばかりはゐられねえだ。何かかんにか仕

事さんねばならないんだで。」と言つたげナ。その本気のねえ元三郎は、

「爺さま、爺さま、何かかにか仕事教へて下はれ。」と言つたら

「うんだら、御庭サカンデなんぼあるか、勘定してくれ。」と言はれたけどナ。それ沢山あるとこさ行つてナ、そこ行つて、勘定した。

「ひとつ、ふたつ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九のつ、十。」十よめたけど、十九、二十、二十九、三十、そこ分らねえわけだ。

いつも、「ひとつ、ふたつ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九のつ、十。」十まで勘定したけどナ。そこにわらしの子供来てよ

おらいのカンデは千だもの

百づつ十では千だろよ

と歌っこ歌ふじょうの。それから「はてな、いつも千ちゅうナ」その子供

おいらのカンデは千だもの

百づつ十では千だろよ

十づつ並べて置いたわけだ、十づつナ。分らねえけど、晩になつてから、「爺さま、爺さま、千あります。」ち言うたけど。「よく勘定したな。」と褒められたじょうも。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com